不思議現象に対する若者の関心・実在信念の構造

The structure of adolescents' belief in mysterious phenomena.

遠藤　由美*
Yumi Endo

はじめに

1．精神世界への関心の高まりと不思議現象

ここ十数年、若者たちの間で「精神世界」への関心が高まっている。一方でそれは「心理学」への人気として現われ、心理学部、心理学科、「心理学概論」など心理学と名のつくところへ志願者・希望者が数多く押し寄せるという心理学ブームが全国的に起きている。他方、週刊誌やテレビ番組上では占いや超能力、催眠などがしばしば人気の高い話題として取り上げられ、「心理ゲーム」「ココロギー」などのポップ・サイコロジーの本が書店の棚のかなりのスペースを占め、さらに巷では「○○の母」などとネーミングされた占い師の前に長い行列ができ、真剣な顔で「宣告」を聞き入る人々が後を絶たない。

奇妙なことに、この2つの現象は必ずしも無関連ではない。現代の心理学ブームは占いや不思議エネルギーなどへの関心に源を発していると、多くの心理学者たちは口々に、非公式に語っている。つまり、大学で心理学を学びたいという若者の動機づけを生み出しているのは、決して心理学領域で生み出された研究知見などではなく、いわゆる巷で支持されているポップ・サイコロジーであるというわけである。筆者もさまざまな大学で年度初めの第一回目の授業で何度か「心理学で学びたいこと」についての簡単なアンケートを実施したが、性格判断、読心術、運勢占い、超能力などが多数あげられ、いずれも心理学専攻人気とポップ・サイコロジーの関連性を示唆するものであった。中には「自分の性格がきらいだが、血液型を変えるわけにはいかない、どうすればよいか知りたい」などと記述する学生もいた。

科学の急速な進歩にもかかわらず、われわれの周囲では、現在のところ科学では説明のつかない心霊などさまざまな超常現象（以下、本稿ではこれを「不思議現象」と呼ぶ）が広く信じられている。これは時に「遊び」や「ゲーム」の範囲を越えて、人々の実際の生活や行動に影響を及ぼし、中には深刻な問題をうみ出しているケースもある。ある人物の「超能力」写真を見て多くの若者が超能力の存在を信じ、やがて彼の教団に入信して大量殺人犯罪に巻き込まれていったという事件は、われわれの記憶に新しい。しかし、幸いにもその事件に巻き込まれなかった人々も縁起やゲンをかつぎ、超能力にあこがれ、一歩間違えば、再び同じような危険に

巻き込まれる可能性を有しているように見える。

かの宗教団体に属し犯罪に関わった人たちは「特殊」であり、われわれは彼らとは違って「ふつうの健全な人間」だと考える人々は多い。だが、不思議現象に魅せられ、それを真実だと信じる点において、後者と前者の間には違いはないと思われる。どちらも、合理的な思考を放棄し、まだ科学で説明されていないことに対して「保留」して解明を待つという態度も放棄し、手身近にだれかが言うことを妥当性への吟味過程抜きに信じる点において、共通性を有しているのである。

さらに直接自分がそれらを信じなくとも、社会の多くの人々が信じることで、それは一種の真実と化し、さまざまな影響力を持ち得る。現在のところ、血液型は性格と関わりがある[1]、つまり血液の型がそれぞれ一定の性格を作りだす、とはいえないというのが定説となっている。その意味で血液型による性格判断は不思議現象の一つと言える。しかしながら、多くの人々が「真実」だと思い、それに従って解釈し、行動し、また他者もそう信じているとみなすことによって、単なる心理ゲームの域を越えて、社会生活で実際に効力を発する。たとえば、結婚式を控えた人が血液型から判断した性格の相性の悪さを理由に結婚をキャンセルする、企業内で企画チームのメンバーを血液型を参考に選抜するなどといったことが現実に起きている。さらに、ある企業では、就職志望書に血液型記入欄を設け、各血液型に対しそれぞれ得点化し選抜の材料にし、さらに大手新聞が血液型による政治論議を掲載したと言われる（菊池、1999）。今日では、性別という要因から性格や能力が推定され就職・昇進などが決定されれば差別として勝訴できる時代となったが、血液型については比較的無防備無意識である。血液型性格が「真実」だと信じている人々にとってはそれは合理的な判断材料であり、それを用いることの正当性妥当性はむしろ堂々と主張されている場合もある。そして、みずからは信じていなくとも、それに巻き込まれる人がでてくるわけである。

2．科学と呪術・宗教

科学は急速に発達した。何十万年ともいわれる人類の長い歴史に比すればつい最近といえる数百年前の中世においてなお、科学はほとんど原始的な段階に留まり、政治は呪術的宣託に基づいておこなわれ（阿部、1991;1992）、魔女裁判が猛威をふるい（度好、1999）、錬金術によって富の造成が真剣に試みられていたほどであった。無論、紀元前において天文学や幾何学など一部の科学は今日からみても驚愕に値する高水準の発達を遂げていたから、一概に科学の発達レベルを議論することは多少無理があるかもしれない。しかしながら、科学が一般市民の生き方や思考・行動にどれほどの影響力をもちえていたかを含めて考えるならば、呪術への依存状態を脱却し、科学と一般市民とが近しい関係にあるようになったのは、一般公教育が普及した現代であると言って差し支えないだろう。

この世は多くのなぞに満ちている。人は望みもしないのに生まれ、やがて死ぬ。ある年は秋になってもまったく実りがなく、餓死が蔓延する。突然山が火を吹き、大地が揺れる。空が掻き曇り、激しい音と光を伴った落雷が人々を奮えあがらせる。時には人が打たれ焦げて死ぬ。

こうしたことは、それぞれ原因について、放電現象だ、地下のマグマの活動が活発化したからだ、太平洋高気圧が高く降水量が少ないからだなどとより科学的合理的な説明を与えることが、今日のわれわれには可能である。しかし、科学黎明期以前には、こうした説明のつかないさまざまな不幸な出来事に遭遇した折、人々は不安をつのらす他にすべはなかったに違いない。しかも、現代に比べ医療や衛生や災害コントロールがなきに等しいほど不充分な時代であったから、現代以上にその種の不幸・不運なできごとに遭遇する機会は格段に多かったはずであり、その分人々は大きな不安と共に生きていたと想像される。

不安を低減する確実な方法のひとつは、その対象を理解し説明を与えることである。この世とはいかなるものかについての説明を提供するため、人間は宗教や文化を発達させてきた（Greenburg, et al., 1990）。落雷や噴火は神や悪魔の怒り、このような解釈があれば不安を低減させ、さらに「神・悪魔を怒らせないようにするためには」と次の対処方法を考案し、それに向けて自己制御することができる。無論、それが直接自然現象や疾病に対して望む効果をもつわけではないが、そうすることによって自己統制の感覚が生まれ、人々の心に落ち着きをもたらすのである。つまり、人は宇宙観や死生観などこの世がどういうものであるかを知ることによって初めて、その中に自らを定位する場所を発見し、不幸や不運の処理ができ、さらに周囲に対してそして自らに対して積極的に関わることができるのである。不可解にも自分に降りかかってくる不幸や不運を呪術的なものに原因を求め、またそれゆえに呪術的なものによってそれを取り除こうする、これは古代の原始的宗教に広くみられる特徴であった。

科学が進歩し、教育や啓蒙を通して多くの人々の間で科学的知識が共有されるようになった今日、落雷や噴火を呪術的に解釈し、それで自らの対応を決める者はほとんどいないだろう。呪術によらなくとも、それらの現象に対して自らの中で科学知識による原因説明が可能であり、それに基づいた対応方略も生み出し得るからである。無論、今日でも科学による解明がなされていない現象は数多く存在している。先人たちの努力にもかかわらず、科学が明らかにしたことはホンのわずかである。しかも、われわれは愛する人を亡くしたときなど、「ガンが増殖していた」「心臓・脳が活動を停止した」などという科学的原因では納得しきれずに、別の理由説明をあえて求め、たとえば「神によって選ばれた」など非科学的解釈によって精神的な安寧を回復することがある。したがって、呪術・宗教的な説明のすべてが科学的な説明に置き換わることは、将来さらに科学が進歩してもありえないことかもしれない。しかしながら、大きく見ればやはり科学の発達とともに人間が呪術や宗教への完璧な依存から抜け出し、科学とより親和的な関係を結んでたきことは確かであろう。

3．不思議現象に対する態度

先にあげた宗教団体による犯罪が世に明らかになったとき、人々を驚かせたことのひとつに、数多くの医師や理系高学歴者（大学院在籍者）がいわゆる幹部として関わりをもっていたことがある。これはその当時繰り返し新聞などのマスコミでも話題として取り上げられ、「科学教育の失敗か」などと大いに議論された（例：朝日新聞、1995.5.8.; 1995.5.28）。つまり、こう

した人たちは市井の一般市民よりはるかに科学の精神なり知識なりを学んでいる人とみなされ、その彼らが「超能力」や「ハルマゲドン」の存在を信じて入信し、それを広めることに従事していたという事実に対して、相いれない矛盾を感じたというわけである。言い換えればこれは、科学をそれほど学んでいない人は科学的思考をしなくても不思議ではないが、科学を身につけた人はそのような不思議現象を信じるのはおかしい、という暗黙の前提を人々がもっていることを意味する。だが果たして、いわゆる科学を専攻する人は、不思議現象に対してどのような態度をもっているのだろうか。また、超能力を信じるような人と、星座による運勢占いを信じるような人とは、異なるのだろうか。そもそも、一般に若者はどの程度そしてどのような不思議現象を信じているのだろうか。これらの点について検討した研究を筆者は寡聞にして知らない。

目的：本研究で明らかにしたい点は次の3点である。第一に、現代の若者が不思議現象に対してどのような態度をもっているかを検討する。ある個人の関心・実在信念は、ある現象に限られているのだろうか。それとも、全体に個人差のようなものがあって、ある現象に関心・実在信念をもつ人は、不思議現象全般にわたってそのような傾向を示すのだろうか。このように、どの程度の若者がという問題とともに、態度の内部構造をも検討する。第二に、そのような信念はどこから来ているのか、情報源について検討する。なぜある不思議現象を信じるようになるのか。信じるということについては、直接情報と間接情報という真実らしさについての情報源があり、それらが真実らしさを作りだすことに影響している（Thompson et al., 2000）。すなわち、直接情報では自分である体験をすることによって、真実らしさについての情報を得るのに対して、間接情報では自分ではなく他者経験の伝聞により真実らしさの情報を得る。そこで、各因子ごとに情報源がどのようなものであるかを検討した。そして第三に、科学専攻がそのような態度に対してどの程度、あるいはどのような影響力をもっているのかを検討することである。

方　法

被験者：一流国立K大学生60名（理系＝48名、文系＝12名）および奈良大学生（文系）。

調査項目：菊池（1998ab）、松井（1991）などを参考に、不思議現象に関する28項目を作成した（表1参照）。それらの項目に対して、関心度、実在信念度、および情報源に関する質問を設定し、それぞれ5件法（1：全然関心ない／実在しない～5：非常に関心ある／確かに実在する）で回答を求めた。情報源については、自分で直接体験した、友人や家族が体験した、マスコミ＝本やテレビなどで知った、その他＝どのような形で知ったか憶えていない、現象そのものを知らないの5種類のうち、もっとも主要なものを1つ選択するように求めた。

調査実施時期：1999年10月に、それぞれ授業時間の一部を利用して実施した。

結 果 と 考 察

まず全体の様相を把握するために、各不思議現象に対してどの程度関心をもっているかを奈良大学K大学別に検討した。表1は、「非常に関心がある」「まあ関心がある」と回答した者の割合と、肯定的に関心を示している者（前者2つの合計）を表わしたものである。中には「こっくりさん」のように関心を示す割合が低い現象もあったが、総じて関心度は高く、中には70%を越える者が関心を示す現象があった。とくに、UFOや宇宙エネルギー、虫の知らせなどの現象については、両大学とも関心度が極めて高かった。

表1　不思議現象に興味があるか

	奈良大学生			K国立大学		
	非常に	まあ	肯定的回答率(%)	非常に	まあ	肯定的回答率(%)
UFO	19.4	31.3	50.7	30.0	18.6	48.6
宇宙人	28.4	29.9	58.3	41.7	20.0	61.7
不思議エネルギー	11.9	34.3	46.2	18.3	26.7	45.0
念力	10.4	16.4	26.8	13.3	15.0	28.3
超能力	11.9	38.8	50.7	16.7	25.0	41.7
テレパシー	6.0	26.9	32.9	11.7	26.7	38.4
死者の霊	14.9	37.3	38.7	18.3	28.3	46.6
前世や来世	17.9	35.8	53.7	18.3	25.0	43.3
生まれ変わり	17.9	32.8	50.7	10.0	28.3	38.3
たたりや呪い	13.4	22.4	35.8	6.7	16.7	23.4
先祖の霊	9.0	20.9	29.9	6.7	13.3	20.0
死者との対話	6.1	4.5	10.6	5.0	15.0	20.0
霊感未来予測	4.5	11.9	16.4	5.0	20.0	25.0
干支と性格	6.0	11.9	17.9	1.7	8.3	10.0
心霊写真	11.9	16.4	28.3	8.3	10.0	18.3
星座と運勢	13.4	29.9	43.3	6.7	13.3	20.0
血液型性格	28.4	28.4	56.8	20.0	30.0	50.0
お守り災難よけ	11.9	20.9	32.8	3.3	16.7	20.0
バチあたり	22.4	31.3	53.7	11.7	25.0	36.7
口さけ女・山姥	3.0	9.0	12.0	1.7	1.7	3.0
雪男	4.5	10.4	14.9	8.3	6.7	15.0
妖怪	7.5	13.4	20.9	8.3	16.7	25.0
神仏願掛け成就	16.4	22.4	38.8	15.0	18.3	33.3
予知夢危険回避	13.4	28.4	41.8	13.3	25.0	38.3
虫の知らせ身内不幸	25.4	46.3	71.7	20.0	33.3	53.0
こっくりさん	9.0	7.5	16.5	0.0	5.0	5.0
大安仏滅運勢	7.5	9.0	16.5	5.0	3.3	8.3
姓名判断	16.4	20.9	37.3	3.3	8.3	11.6

表2は、どの程度それらの現象が実在すると信じているかについて検討したものである。これも同様に「確かに実在する」「実在すると思う」と回答した者の割合と、両者の合計である肯定的信念所有者の割合を示したものである。実在は関心度とほぼ同様の数値を示し、UFOや宇宙人、虫の知らせや性格・運勢占いなどの現象に対して実在性・妥当性を信じている者の割合が概して高かった。

表2　不思議現象は実在するか

	奈良大学生			K国立大学		
	確かに	まあ	肯定的回答率(%)	確かに	まあ	肯定的回答率(%)
UFO	25.4	22.4	47.8	33.3	18.3	51.6
宇宙人	26.9	28.4	55.2	43.3	20.0	63.3
不思議エネルギー	10.4	29.9	40.3	21.7	16.7	38.3
念力	7.5	19.4	26.9	11.7	18.3	30.0
超能力	10.4	17.9	28.4	23.3	13.3	36.7
テレパシー	3.0	25.4	28.4	10.0	15.0	25.0
死者の霊	13.4	22.4	35.8	15.0	25.0	40.0
前世や来世	11.9	32.8	44.8	16.7	10.0	26.7
生まれ変わり	11.9	28.4	40.3	10.0	16.7	26.7
たたりや呪い	6.0	25.4	31.3	8.5	15.3	23.8
先祖の霊	4.5	11.9	16.4	6.7	15.0	21.7
死者との対話	3.0	9.0	11.9	5.0	3.3	8.3
霊感未来予測	4.5	10.4	14.9	1.7	16.7	18.3
干支と性格	6.0	9.0	15.0	3.3	5.0	8.3
心霊写真	11.9	16.4	28.3	13.3	8.3	21.7
星座と運勢	10.4	23.9	34.3	6.7	8.3	15.0
血液型性格	20.9	26.9	47.8	15.0	21.7	36.7
お守り災難よけ	9.0	25.4	34.3	6.7	16.7	23.3
バチあたり	16.4	34.3	50.7	15.0	15.0	30.0
口さけ女・山姥	4.5	6.0	10.5	8.3	0.0	8.3
雪男	4.5	6.0	10.5	10.2	5.1	15.3
妖怪	6.0	7.5	13.5	3.3	6.7	10.0
神仏願掛け成就	13.4	11.9	25.4	11.7	10.0	21.7
予知夢危険回避	14.9	23.9	38.8	6.7	28.3	35.0
虫の知らせ身内不幸	20.9	40.3	61.2	13.3	28.3	41.6
こっくりさん	1.5	7.5	9.0	0.0	0.0	0.0
大安仏滅運勢	7.5	9.0	16.5	1.7	10.0	11.7
姓名判断	13.4	14.9	28.4	6.7	6.7	13.3

<u>因子分析</u>　各現象に対して、おおよそどの程度関心があるか信じているかについての概容を把握した。しかしこれらの現象はおそらく相互に無関連なものとしてあるのではないだろうと思われる。そこで調査に用いた28項目に対して、実在信念度を基に因子分析をおこなった。因

子は主成分分析法で解を求め、さらにバリマックス回転を施したところ、固有値が1以上でかつ意味のある因子が7個得られた（表3）。第一因子は、UFOや宇宙エネルギー、超能力などの6項目で負荷量が高く、擬似科学系因子と名づけられた。第二因子は、死者の霊や前世・来世、生まれ変わりなど5項目が含まれ、旧来宗教系因子と名づけられた。第三因子は心霊写真や霊感予測など4項目が含まれ、霊界系因子と命名された。第四因子は星座運勢や血液型性格、お守りやバチなどの4項目からなり、もっとも一般的に身近なところで観察されることから身近系因子と名づけられた。第五因子は妖怪や雪男、口さけ女など4項目からなり、昔話系と名づけられた。第六因子は虫の知らせや予知夢など3項目であり、直感系と命名された。そ

表3　不思議現象の因子分析の結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
UFO	.772						
宇宙人	.711						
不思議エネルギー	.701						
念力	.625						
超能力	.572						
テレパシー	.534						
死者の霊		.701					
前世や来世		.683					
生まれ変わり		.658					
たたりや呪い		.643					
先祖の霊		.625					
死者との対話			.689				
霊感未来予測			.628				
干支と性格			.557				
心霊写真			.535				
星座と運勢				.787			
血液型性格				.708			
お守り災難よけ				.649			
バチあたり				.579			
口さけ女・山姥					.842		
雪男					.767		
妖怪					.647		
神仏願掛け成就					.491		
予知夢危険回避						.849	
虫の知らせ身内の不幸を知る						.788	
こっくりさん						.399	
大安仏滅運勢							.806
姓名判断							.468
相対寄与率(%)	32.4	9.7	6.4	5.7	4.5	4.3	3.7

して第七因子は、大安・仏滅運勢と姓名判断の2項目だけで、縁起系と名づけられた。なお、これらの各因子においてα係数を算出したところ、順に、.843, .848, .715, .762, .733, .743, .485であった。初めの7つはいずれも十分に高かった。縁起系では高いとはいえないが、項目数が2と少ないためもあると考え、そのまま因子として採用することにした。なお、7因子で全体の66.7%を説明していた。これらの因子はそれぞれ含まれる項目数が異なるため、実在信念因子スコアを求め、以下の分析に使用した。

関心と実在信念　先に、各現象に対する関心度と実在信念度の概観から、関心と実在信念度の数値が極めて類似していたことが判明した。そこで、ある現象に対して関心があることと実在するという信念はどの程度関連しているかを検討することにした。実在因子に基づいて、関心に関しても対応する現象をまとめ、それぞれ関心因子スコアを算出した。そして、関心因子スコアと実在信念スコアの相関係数を求めたところ表4のようになり、どの相関係数も.705～.842までの間に位置し、極めて強い関係があることが判明した。すなわち、ある現象に対して強い関心を有する者は、同時にそれを実在すると信じる者である可能性が極めて高いということである。

表4　実在信念因子スコアと関心因子スコアの相関

擬似科学	.815
身近	.808
旧来宗教	.792
直感	.842
縁起	.771
霊界	.804
昔話	.705

実在信念因子間の関係　ある不思議現象を信じる者は、他の不思議現象も実在すると信じているのだろうか。それとも、各現象に対して人はなんらかの基準で真実らしさを判断し、あることに対しては信じるが他のことは信じないという領域特定化がなされているのだろうか。この問題について検討するために、実在信念因子相互の相関係数を算出した（表5）。その結果、.262～.564の間のいずれも有意な中程度の強さを示す相関が得られた。つまり、ある不思議現象を信じているものは、他の不思議も信じ、逆にある現象を信じない者は他の現象も信じない傾向にあることが見いだされた。先に、関心と実在信念との間には強い関係のあることがみいだされており、ある不思議現象に関心をもつ者は他の現象にも関心をもち、いずれも実在すると信じる傾向にあることになる。表1表2においてそれぞれの現象に対して多くの者が関心を示し実在すると信じていたが、それらはある一群の人々であり、それらの現象のいずれに対しても関心を示さず関心を示さないまた別の一群の人々がいる、という可能性があると解釈される。

実在信念と情報源　調査においては、情報源は5つ設定されていたが、「その他の情報源」「現象を知らない」という2つについては該当するものがそれほど多くなかったため、「自分」「家族・友人」「マスコミ」の3つの情報源に限って分析した。各実在信念因子ごとに情報源を検討した結果、概してマスコミを情報源として挙げる割合が高かった。図1は、実在信念度（棒；

表5　実在信念の因子スコア間相関係数

	擬似科学	身近	旧来宗教	直感	縁起	霊界
身近	.262					
旧来宗教	.564	.513				
直感	.490	.405	.536			
縁起	.266	.436	.425	.280		
霊界	.476	.496	.598	.487	.463	
昔話	.416	.336	.420	.309	.279	.396

note：すべて $p<.01$ 水準で有意である。

左縦軸）とマスコミ情報源（折れ線；右縦軸）を同時に示したものである。ここから、マスコミが強力な情報源となっている不思議現象と、そうでない不思議現象の2種類があることが読み取れる。前者は、擬似科学系、旧来宗教系、霊界系、昔話系であり、マスコミが情報源として指摘される割合は50%を上回っている。これに対し、身近系、直感系、縁起系はマスコミの割合は50%を下回っている。とくに身近系では30%を下回り、対照的に「自分」が19.2%、「家族・友人」が13.6%と自分の直接体験や周囲の人の体験から、信じるようになったとしている。直感系ではマスコミが38.4%であるのに対し、家族・友人が25.3%と他の因子よりも格段に高く、周囲の人の体験談が信念を補強していることがみいだされた。

これらのことから、不思議現象を信じることには、人々が「体験した」と思えることを通して信念を形成する過程と、「体験」の機会がなくマスコミを主情報源としてて受動的に信念を形成する過程とがあることが判明した。

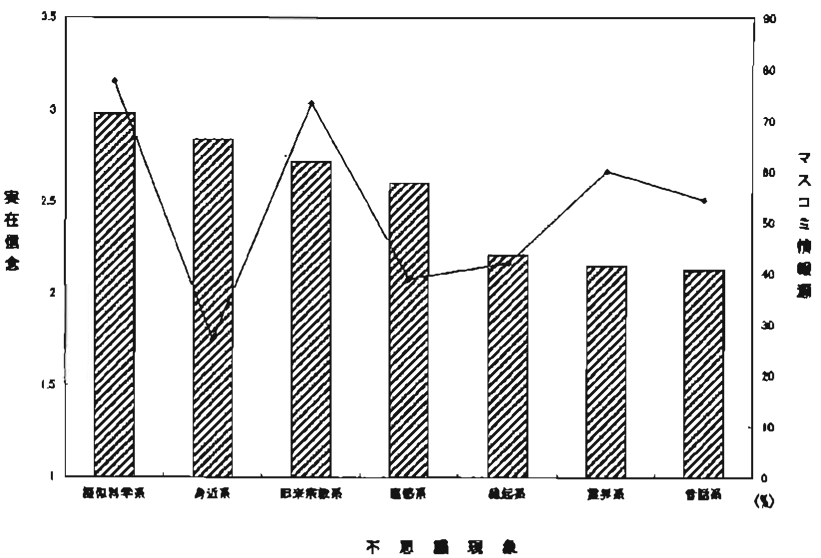

図1　実在信念とマスコミ情報源

専攻と関心・実在信念

専攻（人文系／理系）が不思議現象への関心・実在信念に影響があるかどうかを検討した。人文系は奈良大学とK大学の学生それぞれ67名と18名が含まれる。あらかじめ、両者の間で実在信念についての差異がみられるか検討したが、7因子すべてについて差異が認められなかったため、両者をあわせて1グループの人文系群とした。他方の理系はK大学の41名である。

関心因子スコアに対して、2（専攻）×7（因子）のMANOVAをおこなったところ、身近系因子（$F(1,117) = 9.43, p<.005$）および縁起系因子（$F(1,117) = 3.34, p<.07$）について違いが見られ、人文系の方（それぞれ、3.15(.87)、2.43(1.14)；( )内は標準偏差）が理系（それぞれ、2.57(.94)、2.01(.93)）よりも関心が高かった。しかし、他の不思議現象においては、専攻による関心の違いはみられなかった。

実在因子スコアについて、両群で違いがあるかどうか検討するため、2（専攻）×7（因子）のMANOVAをおこなった。その結果身近系因子において違いが認められ、人文系が平均2.96（SD = .997）であるのに対して理系は平均2.57（SD = .944）で、理系の方が身近系不思議現象に対する実在信念が低かった（$F(1,22) = 4.34, p<.05$）。他の因子では両者の間に有意な違いは見られなかった。すなわち、科学専攻によって、血液型性格などの不思議現象への実在信念度にのみ違いがみられた。

これらのことから、科学専攻は、不思議現象の中で血液型性格や大安・仏滅などの日取りに対する関心や実在信念の違いと関連し、科学専攻者はそれらのいわば日常的な不思議現象にはあまり関わらない傾向がある。しかし、科学専攻が実在信念に違いをもたらしたのはこの身近系だけであり、擬似科学系や霊界系など他の不思議現象への関わりについては、科学専攻は違いをもたらさなかった。

議　論

本研究で明らかになったことは、次の3点である。第1に、若者はさまざまな不思議現象に概して関心が高く実在するという信念をもっているが、ある現象に関心・実在信念を持つものは、概して他の現象に対しても同じように関心・実在信念を抱く傾向があるということである。第2点は、不思議現象に対する態度形成には、マスコミが大きく関わっているものと、マスコミの影響が相対的に大きくないものとがあることが明らかになった。そして第3点は、理系でいわゆる科学を専攻しているか否かということは、日常的身近なものを除いて、不思議現象に対する関心や実在信念の持ち方にはほとんど影響しない。

ここからまず、先の教団による組織的犯罪の際に「なぜ理系高学歴者が…」ということが議論を呼んだが、本研究においても科学専攻か否かにかかわらず、不思議現象への関心・実在信念にはほとんど違いが見られなかったことが確認された。さらにひとつを信じる者は他も信じる傾向にあったことから、専攻よりも個人に特有な何らかの心理的特性の方が強く関連してい

ることが示唆される。たとえば、性格や個人史など個人の基本的な志向性の違いをうみだす何かを考えることができる。無論、それが何であるかを特定する作業は本稿の範囲を超え、不思議現象の態度における個人差検討は今度の検討を待たなければならない。

また、関心と実在信念の関係に関して、関心の高い者はまた強い実在信念をもつ者である傾向が明らかにされたが、これは思考バイアスの観点から議論することができる。社会認知心理学領域では、何らか強い動機（例：自己高揚）をもつと、動機づけられた推論過程（motivated inference: Kunda, 1987）や歪んだ情報探索過程（Murray, et al., 1996; Cohen, et al., 2000）などによって「信じるに値する」証拠（例：「やっぱり私は大きな貢献をした」）を創出し、予言の自己実現を達成する場合が多々あるとされている。不思議現象においても、関心のある者がそれへの肯定情報を提供してくれる本やテレビ番組、友人の話などを積極的に選択し、反証情報を逆に積極的に無視あるいは軽視するなどの認知的情報操作、情報のサンプリング・バイアス（Fiedler, 2000）をおこなうことによって、結果として、それらの仮説が検証され、それが実在信念をうみだすと考えられる。

不思議現象実在を支持する情報提供源として、本やテレビなどいわゆるマスコミが強力なインパクトをもっていることが明らかになった。今日、情報が飛び交う量・速度・範囲いずれもかつてとは比較にならないほど増大し、日々留まるところを知らない。もちろん、マスコミはまた他方で科学についての情報も提供している。しかし、先に述べたように、関心・予期をもつ者はその予期を実現する方向で情報探索や思考をおこなう傾向があるため、不思議現象に関心・予期をもつ者はマスコミによる科学情報提供にはチャンネルをあわさず、かりに情報を入手してもそれを忘却するあるいは歪曲するという認知バイアスを施すのかもしれない。したがって、不思議現象への態度形成におけるマスコミの影響力は不思議現象に関心をもつ者においてとくに強力であり、逆に関心が低い者はそれらの情報探索をおこなわないゆえに、マスコミの影響力は関心高低群において異なる可能性が考えられる。マスコミの影響力については、情報提供側の要因と認知者（情報受信）側の要因とに分けて検討することが必要であろう。

本研究から、多くの若者が不思議現象に強い関心と実在信念をもっていることが確認された。不思議現象を信じるのは決して一部の「へんな」人に限らず、高学歴のごくふつうの若者においても一般的であるという事実に対して、おとなとしてまた教育に携わる者の一人として、何ができるかを問わなければならない。

注

1）血液型性格についての知識はここ十年ほどのブームのせいで、日本の津々浦々に浸透し、今や「常識」とさえ言われるようになった。そのような国民的知識共有の結果、性格テストを実施すると、回答者は自分の血液型に基づいた性格に合致するような情報に着目して自分の性格を理解し、それを自分の性格だと回答する傾向が強まった。そこで、血液型別に回答を集計すると、見事にそれぞれ異なった性格傾向がえられるようになったとされている（菊池、1999；坂元、1995）。まさに予言の自己成就効果である。

引 用 文 献

阿部勤也　1991　西洋中世の男と女－聖性の呪縛の下で　筑摩書房
阿部勤也　1992　西洋中世の愛と人格－「世間」論序説　朝日新聞社
朝日新聞　1995.5.8. オウム事件にみる大学教養教育の貧困
朝日新聞　1995.5.28. 狙われた「頭脳」たち
Cohen, G.L., Aronson, J., & Steel, C.M. 2000　When beliefs yeild to evidence: Reducing biased evaluation by affirming the self.　*Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1151-11164.
Fiedler, K. 2000 Beware of samplesl A cognitive-ecological sampling approach to judgement biases. *Psychological Review*, 107, 659-676.
Greenberg, J., pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Kirkland, S., & Lyon, D. 1990 Evidence for terror management theory Ⅱ : The effects of mortality salience on reactions to those who threaten of bolster the cultural worldview.　*Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 308-318
菊池　聡　1998a　超常現象をなぜ信じるのか：思い込みを生む「体験」のあやうさ　講談社　ブルーバックス
菊池　聡　1998b　予言の心理学　KK ベストセラーズ
菊池　聡　1999　超常現象の心理学：人はなぜオカルトにひかれるのか　平凡社新書
Kunda, Z. 1987 Motivated inference: Self-serving generation and evaluation of causal theories.　*Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 636-647.
Murray, S.L., Holmes, J.G., & Griffin, D.W. 1996　The benefits of positive illusions: Idealization and the construction of satisfaction in close relationships.　*Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 79-98.
坂元　章　1995　血液型ステレオタイプによる選択的な情報使用　－女子大学生に対する２つの実験－　実験社会心理学研究，35, 35-48.
Thompson, M.S., Judd, C.M., & Park, B. 2000　The consequences of communicating social stereotypes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 36, 567-599.
度会好一　1999　魔女幻想－呪術から読み解くヨーロッパ　中公新書

参 考 文 献

西田公昭　1998　信じるこころの科学－マインド・コントロールとビリーフ・システムの社会心理学　サイエンス社

要 約

本研究は、昨今の精神世界への関心の高まりをうけて、現在のところ科学では説明のつかない超常現象を不思議現象と名づけ、不思議現象に対する若者のビリーフの構造を検討することを目的とした。理系および文系の大学生を対象とした調査の結果、第１に、若者はさまざまな不思議現象に概して関心が高く実在するという信念をもっているが、ある現象に関心・実在信念を持つものは概して他の現象に対しても同じように関心・実在信念を抱く傾向があるということ、第２に不思議現象に対する態度形成には、マスコミが大きく関わっているものとマスコミの影響が相対的に大きくないものとがあること、そして第３に理系でいわゆる科学を専攻しているか否かということは、日常的身近なものを除いて不思議現象に対する関心や実在信念の持ち方にはほとんど影響しないことが明らかにされた。

平成 13 年 9 月 7 日原稿受理　*社会学部人間関係学科